

# 現代青年の自立性に関する研究 (3)

## — 困難非回避傾向等との関係 —

### A Study on Independence of Modern Adolescents (3)

— Independence and Tends to Overcome the Difficulties —

金子 劭 榮<sup>\*1</sup> 菱田 陽 子<sup>\*2</sup>

#### 要旨

行動への意欲等との関連から現代青年の自立性の特徴を知るために、我々の自立性尺度について新たに「依存性」因子を加えた7因子構造を確認し、新たに「困難非回避」、「関心・意欲」等5因子からなる行動意欲等を測定し、これらと自立性因子との関係について相関分析等を行った。困難非回避傾向、強い関心・意欲傾向等は、独自性、自立認識、影響されにくさと関連し、他者依存傾向と自立認識との交絡した関係が認められた。

キーワード：現代青年（学生）／自立性／困難非回避傾向／関心・意欲

#### はじめに

子どもを含め現代青年における自立性の弱さや欠如について、その原因や生活における問題点が指摘されることが多い。他者との円滑な関係を確保することは人間にとって必要であることはいうまでもないが、その関係が主体性を欠いていたり一方的な依存的関係であることは、さまざまな課題を自分に合った形で解決しなければならない人間にとって、望ましいことではない。その一方で、自立は他者との関係を絶つことであるという、必ずしも適切ではない認識も存在する。

この自立性の「適切さ」が、具体的にどのようなものであるかを定めることは必ずしも容易ではない。我々の考える自立性については、菱田ら(2010)、菱田ら(印刷中)に述べている。

青年に限らず、人間の自立性は、自らの能力等に対する自信や将来への確かな展望があることが関係していると思われる。近年話題にされることが多い「指示待ち」傾向も、自らの自信の欠如

や将来への展望の曖昧さが関係していると思われる。また、ただ一つの正答を求めることを重視しすぎる傾向等とも関連して、思考柔軟性等も考える必要がある。

これらの視点から本研究では、自立性尺度の信頼性の検討を進めつつ、現代青年の自立性の特徴を、努力志向傾向、興味関心の強さ、完璧志向傾向等との関連から、明らかにしようとしている。先の研究から、自立性も多面的なものであり、従って、他の特性との関係もかなり多様なものとなると考えられる。

#### 目 的

本研究では、現代青年の自立性の特徴を明らかにするために、菱田ら(2010)で検討された自立性尺度について、他者への依存傾向を加えた因子構造の吟味、下位尺度の内的整合性からの信頼性、再検査法による質問項目の信頼性の検討を行う。

さらに、この尺度と本研究のために、新たに現代青年の興味関心の強さ、努力志向、完璧志向傾向等を把握することを目指した質問項目を作成し、これらによる特徴と自立性との関係を明らかにする。

\*<sup>1</sup> KANEKO, Shohei  
北陸学院大学 非常勤講師

\*<sup>2</sup> HISHIDA, Yoko  
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科  
青年の心理

具体的には、以下の傾向が認められるであろうと推測した。

第一に、強い自立性を持つ者は、ここでは具体的に、周囲から影響されにくい、独自性の高い者は、将来への夢を明確に持ち、いろいろなものに対する興味関心が強く、解決が容易ではないものと考えられることに対してもそれを回避することなく挑戦的に振る舞うであろう。

第二に、同時にこの研究の中で我々が自立因子として重要な側面であると考えている適切な依存傾向も、前項に挙げた興味関心の強さや解決困難な事柄に対しても回避しない傾向が認められるであろう。

## 方法

**調査対象** 石川県内の公立・私立大学・短期大学学生 248名(男23、女225)、年齢18～22歳(平均18.9歳)。ここでの人数は、再検査法による信頼性の検討を行うための2回の調査に協力した者であり、かつ、無回答、同一回答の連続、一貫性の無い反応、虚偽反応等が多すぎる不適切な回答をした者を除外した人数である。

**調査実施時期** 2010年7月

**実施手続き** 各大学等の教室で、各授業担当教員によって実施された。

**調査内容** ①自立性質問項目50項目。菱田ら(2010)において作成された自立性尺度項目に、その後の検討により加えるべきであると考えた「依存性」「影響受けやすさ」等に関する質問項目、及び菱田ら(2010)と同様の形式により不適切な回答であるか否かを判断するための14項目を考え、これらを含めた計50項目、②現代青年の困難非回避傾向、興味関心の強さ、努力志向、完璧志向傾向等を内容とする質問項目計40項目である。

なお、自立性項目については、再検査法による信頼性の検討のために、1週間の間隔を置いて繰り返し実施された。

## 結果

### 1 自立性尺度の検討

(1) 自立性尺度項目の再検査法による信頼性

自立性尺度項目36項目について、再検査法に

よる信頼性を、前後の評定値の相関係数によって求めたところ、.406～.714であり、「私には、安心して頼れる人がいる」、「自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている」等では高い値を示す一方、「多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだと思う」、「他の人が何か言っても、自分の意見が変わらないことが多い」等では低い値を示した。確かな信頼性を示したとは必ずしも言えないが、相応の値であると判断した(表1)。なお、ここには後の因子分析により採用されない項目も含まれている。

### (2) 自立性の因子構造と下位尺度の内的整合性

ここで用いた自立性尺度の因子構造については、これまでの分析においてと同様、最尤法による因子抽出、プロマックス法による軸の回転によるものである。先に触れたとおり、この自立性尺度は菱田ら(2010)に一部項目を加えたものであり、菱田ら(印刷中)と同じものであるが、ここでは回答者が異なるため、因子負荷量については、異なること等から、因子名も本稿においてはこの結果によって異なった名称を採用している。因子構造としてはほぼ同じものであると考えて良いが、本稿における分析で使用する因子得点は、すべてこの因子分析結果によるものである。

自立性因子としては、「自分の将来のことをよく考えている」等からなる「将来展望」因子、「周りの人の意見に流されやすい」等からなる「影響受けやすさ」因子、「周りの人とよい関係を維持することができる」等からなる「対人協調」因子、「家から自立するには何が大切かを知っている」等からなる「自立の認識」因子、「自分ならではの好みや考え方がある」等からなる「独自性」因子、「状況にあわせて感情をコントロールすることができない」等からなる「感情統制」因子、「自分ではどうにもならないのに、他人に助けを求められない」等からなる「非依存性」因子なる7因子によって、構成されると考えた。

なお、ここでの因子間相関を見ると、「将来展望」「自立認識」間、「対人協調」「自立認識」間、「影響受けやすさ」「独自性」間(逆)でそれぞれ、あまり強くはないが相関している、即ち相互に独立であるとは必ずしも言えないことに注目しておきたい。

表 1 再検査による相関係数

	相関係数
1.相手の意見にすぐ納得してしまう	.458
3.周りの人と協力して物事に取り組むことができる	.631
4.一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている	.596
5.自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている	.689
7.これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている	.466
8.簡単に周囲の人の影響を受けてしまう	.663
12.自分ではどうにもならない深刻なときに、人に頼るのは当然だ	.548
13.周りの人とよい関係を維持することができる	.518
14.他の人が何か言っても、自分の意見が変わらないことが多い	.455
15.みんなと同じような服装はしたくない	.676
16.行事のときなど、自分からは何もしないことが多い	.645
17.周りの人の意見に流されやすい	.672
19.他人の気持ちを思いやることができる	.553
20.精神的に自立するには何が必要かを知っている	.561
21.私を支えてくれる人はいない	.650
22.将来に対する見通しや考えをもって生活している	.627
24.相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	.555
25.悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	.605
26.多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだと思う	.406
28.友だちに頼りすぎる傾向がある	.551
29.失敗したときも、冷静に考えることができる	.543
30.自分ならではの好みや考え方が	.494
31.友だちと議論していると、相手の方が正しいと思ってしまう	.666
32.自分の将来のことをよく考えている	.674
33.私には、安心して頼れる人がいる	.714
34.家から自立するには何が大切かを知っている	.626
36.つい感情にまかせて行動してしまう	.485
37.親は、いざとなれば私を助けてくれる	.628
38.いつも落ち着いて行動できる	.625
39.将来の目標がなかなか定まらない	.668
41.いけないと思いつながら、頑張りすぎてしまう	.564
42.他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ	.466
43.自分ではどうにもならないのに、他人に助けを求められない	.530
47.自分なりの価値判断の基準を持っている	.492
49.状況にあわせて感情をコントロールすることができない	.504
50.どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない	.467

表 2 自立性因子構造

項 目	I	II	III	IV	V	VI	VII
5.自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている	.939	.032	-.096	.010	-.038	.018	-.071
39.将来の目標がなかなか定まらない	-.834	.023	.064	.107	.005	-.005	.078
32.自分の将来のことをよく考えている	.790	.002	.106	.008	.071	-.031	.046
22.将来に対する見通しや考えをもって生活している	.710	-.024	.009	.077	.005	.070	.093
17.周りの人の意見に流されやすい	-.067	.901	-.046	-.044	-.043	.150	.153
8.簡単に周囲の人の影響を受けてしまう	-.001	.890	-.023	-.010	.172	.034	.083
1.相手の意見にすぐ納得してしまう	.106	.536	.134	.014	-.299	-.001	-.006
31.友だちと議論していると、相手の方が正しいと思ってしまう	-.029	.509	-.103	.148	-.120	-.011	-.031
28.友だちに頼りすぎる傾向がある	.055	.470	-.086	.044	.130	-.123	-.334
13.周りの人とよい関係を維持することができる	-.050	.022	.696	-.054	.150	.071	-.132
3.周りの人と協力して物事に取り組むことができる	.052	.018	.612	-.048	-.111	.135	-.060
19.他人の気持ちを思いやることができる	-.066	-.048	.569	.025	-.086	.087	.056
24.相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	-.018	-.113	.502	.143	-.173	.028	.013
34.家から自立するには何が大切かを知っている	.014	.046	-.046	.962	.001	-.062	.003
20.精神的に自立するには何が必要かを知っている	-.030	.013	.072	.659	.046	.047	.010
4.一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている	-.029	.019	.017	.608	.022	.074	-.129
30.自分ならではの好みや考え方が	.040	.063	-.033	-.009	.697	-.036	-.042
47.自分なりの価値判断の基準を持っている	-.004	-.078	-.019	.017	.614	.060	-.006
42.他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ	.006	-.003	-.058	.067	.581	.159	.033
14.他の人が何か言っても、自分の意見が変わらないことが多い	-.056	-.309	-.183	.009	.419	.069	.051
49.状況にあわせて感情をコントロールすることができない	.018	-.003	-.080	-.050	.022	-.723	.120
38.いつも落ち着いて行動できる	.094	.027	.064	-.017	.116	.555	.076
25.悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	-.035	.115	.250	-.021	.111	.539	.025
29.失敗したときも、冷静に考えることができる	.094	-.325	.032	.070	.024	.364	.082
43.自分ではどうにもならないのに、他人に助けを求められない	-.048	.086	-.054	-.100	.035	-.026	.691
41.いけないと思いつながら、頑張りすぎてしまう	.080	.003	.285	.086	.161	-.325	.457
12.自分ではどうにもならない深刻なときに、人に頼るのは当然だ	-.007	.012	.299	-.027	.203	-.161	-.448
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI	VII
I 将来展望		-.242	.207	.361	.185	.173	.223
II 影響受けやすさ	-.242		.053	-.186	-.411	-.345	-.194
III 対人協調	.207	.053		.425	.215	.286	-.030
IV 自立認識	.361	-.186	.425		.237	.262	.175
V 独自性	.185	-.411	.215	.237		.148	.004
VI 感情統制	.173	-.345	.286	.262	.148		.056
VII 非依存	.223	-.194	-.030	.175	.004	.056	

これに従った自立性に関する下位尺度について、内的整合性を示す Chronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ、「将来展望」.887 (4)、「影響受けやすさ」.790 (5)、「対人協調」.716 (4)、「自立認識」.778 (3)、「独自性」.710 (4)、「感情統制」.712 (4)、「非依存性」.481 (3)であった( )内の数字は当該の項目数)。6つの下位尺度については相応の値を示しているが、「非依存」については極めて低い値を示している。適切な依存傾向については、我々は自立性尺度の中で重要な意味を持つと考えているが、ここでは内的整合性の面で適切な測定がなされているとは言えない。今後の検討が必要である。

## 2 困難非回避傾向等の測定

### (1) 困難非回避傾向等の因子構造

この調査のために作成した40項目に対する回答をもとに、ここで考えている、面倒なことや困難を回避しない傾向、興味関心意欲の強さ、間違いに対する抵抗感の弱さ等の因子が認められると考へ、因子分析を行った(最尤法による因子抽出、プロマックス法による軸の回転)。

因子としては、「できそうもないことでも、頑張れば出来ることが多い」等からなる「困難非回避」傾向因子、「何に対しても興味がない」等からなる「関心・意欲(低さ)」因子、「周りの人から高く評価される人になりたい」等からなる「将来の夢」因子、「ちょっとでも失敗すると、いつまでも気になる」等からなる「心配性」因子、「小さな間違いはしかたないという甘い考え方は理解できない」等からなる「完璧志向」因子、が確認された(表3)。

因子間相関をみると、「困難非回避」「関心・意欲」間で逆相関、「困難非回避」「将来の夢」間で相関しているが、やゝ注目したい。具体的には、難問にも尻込みしない傾向は、簡単に諦めない傾向や将来への夢の大きさと関連している。

予め想定した因子が確認されたとは必ずしも言えない。以下、ここで得られた因子に従って、若者の自立性の特徴を知るための分析を試みることにする。

### (2) 内的整合性

ここで得られた困難非回避傾向等の因子について、それらを下位尺度としたときの内的整合性を

表3 困難非回避傾向等因子構造

	I	II	III	IV	V
29.大切なことは、面倒でも避けないようにしている	.622	.092	-.003	-.156	.037
34.できそうもないことでも、頑張れば出来ることが多い	.596	-.012	.110	-.165	-.063
12.面倒になることが分かっている、正しいと思うことは実行している	.543	-.034	.042	.078	.051
4.人間にとって大切なものは、能力ではなく努力だ	.528	-.008	-.093	.022	-.113
9.自分が正しいと考えることを理解してもらえない人には、一生懸命説得するようにしている	.521	-.051	-.036	-.005	.042
36.議論では、少しくらい納得できなくても、まとめる方が大切だ	.484	-.042	.168	.024	-.071
21.いい加減なところで妥協するのはいやだ	.435	-.076	-.104	.210	.257
1.他人と激しい議論をするのはいやだ	.253	.682	-.158	-.266	.055
25.何に対しても興味がない	-.113	.552	-.035	-.168	.224
26.何事も、完璧にすることは不可能だと思う	-.216	.548	.259	-.013	-.117
20.今、特にしたいことはない	-.118	.489	-.131	-.023	.072
22.面倒になりそうなときは、自分の意見にこだわらない	.033	.481	.059	.057	-.170
27.議論を長引かせたり混乱させたりしないために、多くの人と違った主張をしない方が良い	-.093	.474	-.030	.125	.087
18.将来、あまり大きなことは出来ないような気がする	-.017	.466	-.167	.202	-.049
8.頑張っても、うまくいかないことが多い	-.058	.396	.221	.075	.044
32.巨大な富を得たい	-.129	.134	.767	-.089	-.013
37.周りの人から高く評価される人になりたい	.096	-.030	.606	.101	.034
10.何か大きなことをしたい	.088	-.220	.555	-.072	.024
13.人に負けない力をつけたい	.053	-.033	.515	.123	-.011
23.将来は、他人をリードする立場に立ちたい	.117	-.150	.375	-.113	.288
33.ちょっとでも失敗すると、いつまでも気になる	-.109	-.049	.045	.781	.041
5.少々失敗しても気にしない方だ	.095	.166	.062	.708	-.073
11.意見が対立して、相手との関係が悪くならないか、心配することがある	.297	.277	.079	.403	-.221
16.何をすることも、絶対間違いが無いようにしたい	.143	.300	.081	.376	.201
38.小さな間違いはしかたないという甘い考え方は理解できない	.004	.012	-.089	.072	.837
35.パーフェクトでなければ意味がない	-.073	.153	.251	.046	.500
因子間相関					
I 困難非回避		-.416	.368	.009	.319
II 関心・意欲の低さ	-.416		-.116	.309	-.271
III 将来の夢	.368	-.116		.146	.155
IV 心配性	.009	.309	.146		.087
V 完璧志向	.319	-.271	.155	.087	

確認するために Chronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ、「困難非回避」.749 (7)、「関心・意欲」(低さ) .746 (8)、「将来の夢」.730 (5)、「心配性」.673 (4)、「完璧志向」.562 (2)であった(( )内の数字は当該の項目数)。

「完璧志向」はかなり低い値を示しているが、他の下位尺度については相応の値を示し、内的整合性については深刻な問題はないようである。ただ、本研究においては、適切な自立性は、一つの重要な特徴として完璧志向傾向に逆に関連していると想定したので、この部分を測定するために、項目作成を中心とした更なる検討が必要である。

### 3 自立性と困難非回避傾向等との関係

#### (1) 相関関係

自立性及び困難非回避傾向等について、両者間の関係を明らかにするために、それぞれ因子得点を求め、因子得点間の相関係数を求めた(表4)。

ここで測定を試みた「困難非回避」傾向、「関心・意欲」の強さ等との関係を見ると、「独自性」の高い者ほど、困難の事態を回避しようとはせず、関心意欲は強く、将来の夢を大きく持ち、小さなことを気に病むことがない傾向を示す。また特に精神的に自立するためにどのようにすればよいかについて、それなりに自分で分かっている者ほど(「自立認識」)、困難な事態を避けようとはせず、関心・意欲は強く、将来の夢は大きく、完璧志向傾向が強い。

さらに他者や周囲からの影響を受けやすいと感じている者は(「影響受けやすさ」)、関心・意欲は弱く、小さなことを気にする傾向があり、完璧志向傾向は低く、かなり困難な状況を避ける傾向も認められる。また感情に溺れる傾向が少ない者は(「感情統制」)、関心意欲は強く、小さなこと

に気に病む傾向はなく、困難な事態を避けようとする傾向は少ない。

また、ここで測定していると我々が考えている「非依存性」については、甘えに近い幼い依存傾向とは異なる、人間としてむしろ望ましい依存傾向を目指しているが、ここまでの我々の分析によってそれが確認されているとは言えない。我々は、必要ときでも他人に頼ることが出来ない傾向を考えているが、ここでの相関関係からは、この(適切だと考えたい)依存傾向が弱いほど、小さなことを気にする傾向が強く、完璧志向が強い傾向が認められる。即ち、我々の仮説に沿って考えれば、このような依存関係を持たない者ほど、小さなことを気にして、完璧なことをしないと気が済まないという堅い性質が、そこにあることを伺わせる。逆に言えば、他者に対して適切な依存関係を維持することによって、小さなことまで気にするような不安定な生活から解放される可能性を窺わせる。

さらに、将来展望が確立しているほど、困難な事態を回避しない傾向があり、関心・意欲は高いことが認められている。

ここで我々が測定していると考えている自立性尺度の測定の確かさについては、なお吟味改善の余地があると考えているので、あまり断定的に結論づけることは勿論出来ないが、先に触れているように、自立性下位尺度の「将来展望」と「自立認識」、「対人協調」と「自立認識」、「影響受けやすさ」(逆)と「独自性」との間に相関がある(独立性が認められていない)ことも考慮する必要がある。「自立認識」は、いわば一人の大人になることと関連しており大人になるにはどのようなことが必要であるかを考えそれなりに自分としての理解をしている者と思われるが、そのような若者

表4 自立性と困難非回避傾向等との関係

	困難非回避	関心・意欲 の低さ	将来の夢	心配傾向	完璧志向
将来展望	.259	-.396	.090	-.120	.114
影響受けやすさ	-.167	.392	-.097	.355	-.225
対人協調	.424	-.271	.184	-.082	.069
自立認識	.356	-.336	.221	-.125	.249
独自性	.334	-.401	.277	-.180	.060
感情統制	.152	-.221	.006	-.262	.083
非依存性	.085	.018	.058	.181	.177

太字は $p<.05$

は、将来展望を考えある程度確立しており、他者との関係を持つことについても一定の考え方と自信を持っていると思われる。影響受けやすさと独自性は、同次元ではないが、どちらかといえば逆傾向であることを示している。

このような相互に相関する下位尺度について考えると、面倒なことを避けようしたり、関心や意欲に欠けるという傾向は認められず、また小さなことを気に病むという傾向も弱いことが認められる。相互に相関しない下位尺度については、関心・意欲等とは、これらと異なる傾向を示している。

(2) 自立性下位領域による比較

1) 各自立因子毎の比較

前項の相関関係を明らかにする相関係数による方法によれば、両変数間の直線的関係を明らかにすることが出来るが、ここで扱った自立性因子と

困難非回避傾向等との間には、直線的傾向が認められない可能性もある。

そこで、自立性についての各因子（下位尺度）毎に、各因子得点によって、その構成人数がほぼ等しい（各群の人数は全体の30%以上）高群、中群、低群を構成し、それらの各群が「困難非回避」傾向等についてどのように異なるかを知るために、それらの因子得点（平均値）を比較した（一元配置分散分析、表5）。また、図1-1～1-3は、その一部について、自立因子毎に高・中・低群における「困難非回避」傾向等の因子得点（平均値）を示したものである。

先の相関係数によって判明したものと同様の傾向が多いが、多重比較により、これらの間の関係が必ずしも直線関係でないことも判明した。

自立性因子としての将来展望が高い（将来に対する関心が強く展望が比較的明確である）者ほ

表5 自立因子群別の特性平均値（因子得点）

		将来展望	影響受けやすさ	対人協調	自立認識	独自性	感情統制	非依存
困難非回避	低	-.216	.138	-.360	-.232	-.394	-.072	-.040
	中	.036	.052	.008	-.136	.124	-.041	-.006
	高	.259	-.111	.424	.441	.341	.181	.123
	有意差	低<高		低<中<高	低<中<高	低<中<高		
関心の低さ	低	.383	-.386	.296	.287	.493	.192	-.055
	中	-.017	-.006	-.111	.019	-.115	.015	.032
	高	-.400	.352	-.214	-.331	-.401	-.219	-.009
	有意差	低>中>高	低<中<高	低>中<高	低<中>高	低>中<高	低>高	
将来の夢	低	-.096	.109	-.103	-.120	-.248	.069	-.045
	中	.047	-.025	-.035	-.050	.096	.002	-.083
	高	.096	-.035	.181	.214	.196	-.020	.177
	有意差				低<高	低<中<高		
心配性	低	.075	-.364	.118	.093	.267	.194	-.175
	中	.054	.015	-.091	.085	-.047	.052	.007
	高	-.097	.374	.005	-.142	-.183	-.197	.200
	有意差		低<中<高			低>高	低>高	低<高
完璧志向	低	-.089	.214	-.163	-.203	-.168	-.189	-.243
	中	-.040	-.022	.159	-.030	.182	.220	.024
	高	.138	-.179	.015	.238	-.009	-.040	.222
	有意差		低>高		低<高	低<中	低<中	低<高

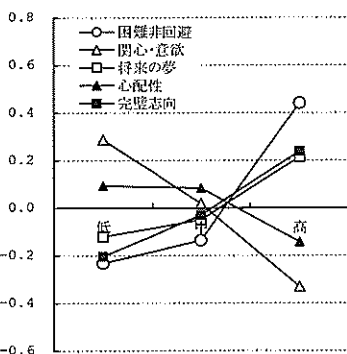


図1-1 自立認識による相違

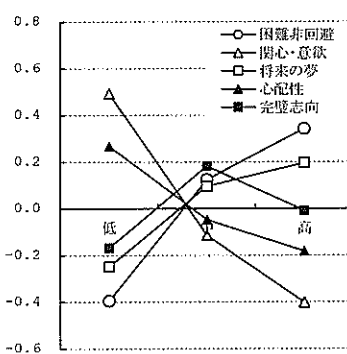


図1-2 独自性による相違

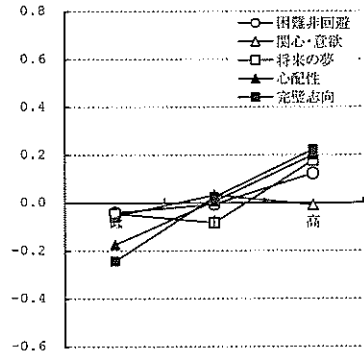


図1-3 非依存による相違

ど困難な事態が予想されても回避しない傾向があり、将来展望への関心が強いほど、関心・意欲が際立って強い傾向を示している。影響受けやすさについては、影響を受けやすいほど、明確に関心・意欲が弱く、明らかに心配性傾向が強い傾向にある。また、影響を受けやすい者ほど、完璧志向が弱い。また、対人協調性が特に低い者は、関心・意欲が低く、高いほど明らかに困難非回避傾向が強い、つまり困難であると予想されても尻込みすることはない。

他方、自立認識、独自性との関係については顕著な関連が認められ、自立認識が特に高い者は、困難非回避傾向が強く、関心・意欲が特に強い。自立認識が高いほど、将来への夢を描いている傾向が強く、完璧志向傾向が強い。また、独自性が特に弱い者については、困難非回避傾向が特に弱く、関心・意欲が特に弱く、将来の夢への関心が弱い。独自性についてみると、特にこれが弱い者は困難を回避しようとし、関心・意欲が弱く、将来の夢への関心も弱い。またこれが弱いほど心配性である傾向が認められるが、完璧志向傾向については、中くらいの独自性の者が独自性の弱い者よりも完璧志向が強い傾向にある。

感情統制については、これが強いほど、関心・意欲が強く、心配性傾向が弱い傾向にあり、ただ完璧志向傾向については、感情統制が中くらいの者が弱い者よりも完璧志向が強い。

非依存的傾向が強いほど、心配性が強く、完璧志向傾向が強い傾向が認められ、ここで測定した依存傾向は、若者にとって必ずしも望ましい姿を反映したものになっていない可能性がある。

以上が、自立性領域（因子）毎にみた傾向であるが、自立性傾向が現実の行動等にどのように反映しているかについては、他との独立性を示す「独自性」、「自立認識」、そして「影響されやすさ（逆）」がどちらかと言えば適応的に行動することに関連を持ち、重要な役割を果たしていることを窺わせる。ただ、我々が注目したい適切な依存性は、ここでは適切に測定できなかった可能性もあるが、適応的行動のためにこの種の依存性が必要であることを確認することは出来なかった。今後、関連する質問項目の吟味などが必要であろう。

## 2) 2つの自立因子との関係

一つの自立性因子が必ずしも他の自立性因子と関係なく機能しているわけではない。そこでここでは、2つの自立性下位領域を組み合わせたもの（例えば「自立性」と「依存」）と、ここで取り上げた「困難非回避」傾向等との関係をみる、1つの自立性因子（下位領域）のみより複数の因子を考える方が、現実の自立性をよりよく示すと考えるとともに、ここで明らかにしようとしている関係も、より明らかになると考えた。

我々は、他者との形式的な自立や依存ではなく、適度の自立と適度の依存傾向を示すのが適切であると考え、このような類型を示す個人が、日常生活における適切な態度・行動傾向を示すと考える。例えば、ある程度以上の独立性を示しかつある程度以上の依存傾向を示す者と、逆にこの両方ともが弱い傾向の者とを比較した場合、前者の方がより望ましい傾向、例えばここで測定を試みた事柄について考えれば、日常においては面倒なことでも避けることはせず、いろんなものに関心を示し意欲的に行動しようとする等の特徴を示すと予測する。

この視点から、自立性2領域（因子）を考え、それらと「困難非回避」傾向等行動特徴に関する因子得点（平均値）を比較した（二元配置分散分析）。ただし、自立性7因子すべての組み合わせを考えることは極めて煩雑であり、かつそれは必ずしも有効な情報を与えてくれないと思われるので、ここではその一部分のみをとりあげる。

先に述べたように、我々は日常的な望ましい態度・行動には、適切な独立傾向と適切な依存傾向が必要であると考えたいので、「独自性」傾向と「非依存」傾向、及び「自立認識」と「非依存」傾向とについて比較することにした。

### ①独自性、依存性との関係

まず独立傾向と依存傾向について、これらによる「困難非回避」傾向等の相違を確認するために、「困難非回避」傾向等の因子得点を従属変数、「独自性」と「依存性」なる自立性の因子得点による2種類の群を独立変数とした2要因の分散分析を行った。表6は、これらの群の「困難非回避」傾向等の因子得点の平均値を示し、有意性の欄は、分散分析によって主効果が有意となった変数名を示している。交互作用はいずれも有意とはならな

表6 依存傾向と独自性の効果

		依存	中位	非依存	有意性
非困難回避	非独自	-.418	-.344	-.407	独自性
	中独自	.119	.188	.043	
	独自	.183	.394	.469	
関心・意欲	非独自	.408	.339	.781	独自性
	中独自	-.134	-.080	-.113	
	独自	-.431	-.340	-.459	
将来の夢	非独自	-.321	-.179	-.301	独自性
	中独自	.250	-.039	.183	
	独自	-.041	.290	.348	
心配性	非独自	-.002	.289	.471	独自性 依存
	中独自	-.173	.020	.064	
	独自	-.343	-.283	.016	
完璧志向	非独自	-.329	-.043	-.090	独自性 依存
	中独自	-.158	.250	.506	
	独自	-.237	.035	.139	

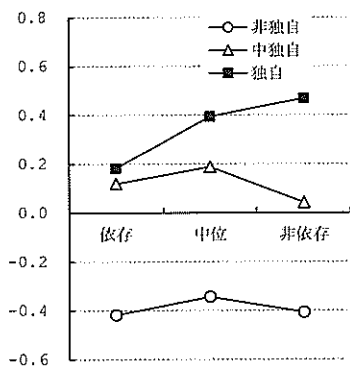


図2-1 独自性・依存と困難非回避

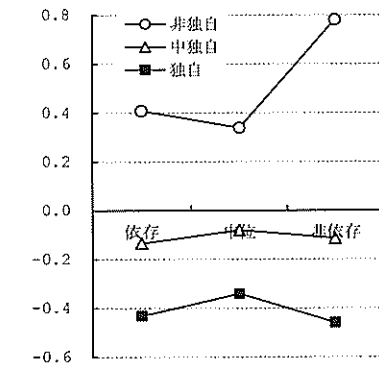


図2-2 独自性・依存と関心・意欲低さ

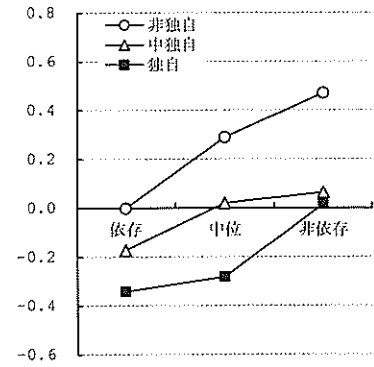


図2-3 独自性・依存と心配性

かった。また図2-1～2-3は、これらの一部分について図示したものである。

「困難非回避」傾向については、「独自性」の主効果が有意となったが、「依存」傾向の主効果は有意とはならず、交互作用も有意ではなかった。特に独自性の強い者が、面倒になりそうなことでも回避しない傾向が認められた。

「関心・意欲の強さ」（数値が大きいほど関心・意欲が低い）、「将来の夢」についても、「独自性」の主効果のみが有意となり、独自性の強いものほど関心・意欲が強い傾向、将来の夢をより具体的に考えている傾向が認められる。

心配性（小さなことを気にかける等）傾向については、「独自性」も「依存」傾向も主効果が有意となり、多重比較の結果によれば、特に独自性の弱い群でこの心配性傾向が強く、依存傾向については、非依存傾向が高い、つまり他者に対して依存できないの方が心配性傾向が認められた。これについても、交互作用は認められない。

「完璧志向」傾向についても、「独自性」も「依

存」傾向も主効果が有意となったが、やはり交互作用は有意とはならなかった。ただ、関係は直線的ではなく、中位に独自傾向を示す者が完璧傾向が高く、また依存傾向についてはこれを示す者が完璧志向傾向を示さず、他者に依存できないの方が完璧志向傾向を示している。

以上の結果を見ると、「独自性」と「依存性」との関係については、ここで取り上げた個人特性については、いずれも交互作用が認められない等、さほどその関係は複雑ではない。即ち、ここでの「独自性」と「依存」傾向と組み合わせても、特有の傾向を認めることは出来なかった。

すなわち、独自性の高いほど、困難な事態を回避しようとはせず、興味・関心や意欲が高く、将来の夢は大きく、心配しすぎる傾向が弱い。ただ、完璧志向傾向が高い傾向を示しているのは、独自性が中位の者であり、相関係数によっては分からなかった部分である。

また、「依存傾向」については、依存傾向が弱い者ほど小さなことを気にする「心配性」傾向が



あり、「完璧志向」傾向がある。その他の特性については関連が認められなかった。ただ、ここでの依存傾向は、小さなことを気に病んだり完璧志向傾向と関係していることは、これらのある種の不適応状況とも考えられ、その意味では、我々が考えている、人間にとって必要な依存傾向の一端を測定していることを窺わせる。

②自立認識、依存性との関係

次に、自立傾向の一つとして、「自立認識」(精神的に自立するにはどうすればよいか分かっている、等)と「依存」傾向をと考え、「困難非回避」傾向等といかなる関連があるかを明らかにするために、二元配置分散分析を試みた(表7)。交互作用が有意であるものについては表7の有意性欄に「交互作用」と記している。

「困難非回避」傾向については、自立認識の主効果が有意、交互作用有意であり、多重比較により、自立認識が強いほど困難非回避傾向強いこと

を確認した。

交互作用が有意であるが、自立認識が強い者については特に非依存傾向が強いと困難非回避傾向が強い。他方、自立認識があまり強くない者については、非依存傾向が強い者の方が困難回避傾向が弱い傾向が認められる。自立認識が確立している若者は他者に対して依存する傾向がない方が困難な事態を回避しようとしませんが、どうしたら自立できるか分からないと感じているような若者の場合には、他者に頼ることが出来ない場合には、面倒なことは避けたいと感じることを示している。

「関心・意欲」については、自立認識の主効果が有意、交互作用も有意である。具体的には、自立認識が明確であるほど、関心・意欲が高い。ただ交互作用が有意であることから、この傾向は、非依存傾向を示す者に顕著で、依存傾向にある者は、自立認識の相違による差はさほど顕著でない。中程度の依存傾向を示す者では、自立認識による

表7 依存傾向と自立認識の効果

		依存	中位	非依存	有意性
非 困 難 回 避	低認識	-.141	-.213	-.463	自立認識 交互作用
	中位	-.033	-.013	-.388	
	自立認識	.159	.358	.720	
関 心 ・ 意 欲	低認識	.062	.203	.657	自立認識 交互作用
	中位	.023	-.120	.252	
	自立認識	-.390	-.027	-.595	
将 来 の 夢	低認識	-.125	-.149	-.293	自立認識
	中位	.164	-.110	.214	
	自立認識	-.135	.265	.362	
心 配 性	低認識	-.188	.090	.387	自立認識 依存傾向
	中位	-.040	.159	.492	
	自立認識	-.312	-.118	-.152	
志 向 壁	低認識	-.360	.070	-.173	自立認識
	中位	-.329	.040	.097	
	自立認識	.103	.130	.462	

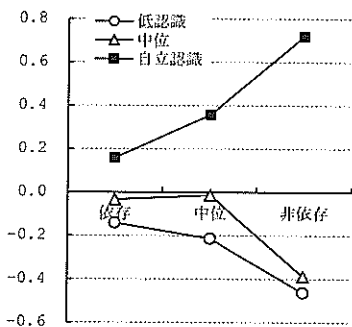


図3-1 自立認識・依存と困難非回避

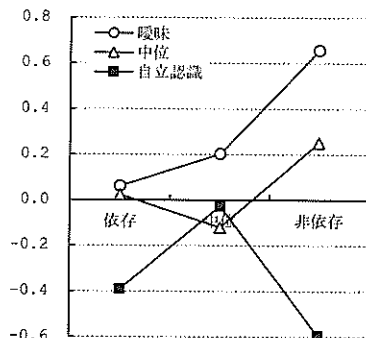


図3-2 自立認識・依存と関心意欲低さ

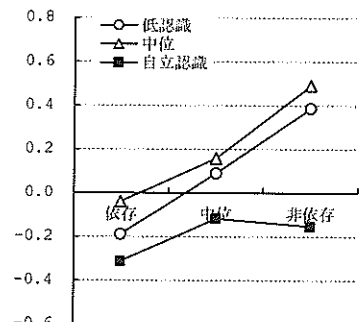


図3-3 自立認識・依存と心配性

差はほとんどないが、全体の傾向を見ると、この場合も先の「困難非回避」傾向の場合と同様、自立認識の明確な者の場合は依存できない者である方がむしろ関心・意欲が強い傾向が窺えるが、自立認識が曖昧な者で依存できない者は関心意欲が極端に弱い傾向が認められる。

他の3つの特性については、交互作用が認められず先の1要因を考えた場合と同じ傾向を示している。即ち、自立認識の高い者の方が将来の夢を持つ傾向が認められ、心配性傾向については、依存傾向が低いほど心配性であり、自立認識が特に強い者は心配性でない。ここでは、自立認識が中低位の者が、心配性傾向であるようだ。また、自立認識が強いほど完璧志向が認められる。

先にも述べたとおり、ここでは「困難非回避」傾向及び「関心・意欲」の強さについて、自立性因子による交互作用が認められ、自立認識が明確でない者にとって、他人に対して依存できない傾向が、さまざまな場面での行動を消極的にしていることが判明したが、この傾向については若者の生き方についての重要な示唆を与えていると思われる。

しかし、他者との関係とくに独立性を考えれば、ここで測定しているものとして独自性や自立認識の他、影響受けやすさも逆の方向ではあるがこれに関連するものとして取り扱うことが可能であろう。しかしこれらを独立変数として実施した分散分析によって、交互作用が認められたのは自立認識のみであったことから、何故自立認識のみがそのような関係を示すのかという課題も含めて、更に吟味が必要であろう。

### まとめと今後の課題

本研究では、現代青年の自立性の特徴を理解するために、我々の作成した自立性尺度による傾向と他の諸特徴との関連をみながら、我々の自立性尺度の信頼性の検討もしつつ、現代青年の自立性の特徴と問題点を探ろうとした。

易きに流れることのない、広い興味・関心と意欲の強さ、将来への夢を持つ、些細なことに拘らない等、適応的な態度・行動のためには、我々が自立性として考えてきた、独自性、自立認識、更には良い意味での依存性が必要であると考え、そ

れを確認することを目指した。

具体的結果としては、困難が予想される事態を安易に回避しない傾向やさまざまなものに対する大きな関心や行動への意欲等は、他者と自分との相違を大切に考える独自性、いかにすれば精神的に自立することが出来るかが分かっている自立認識、周囲からの影響を受けやすくないこと、更には他者との関係を適切に確保することが出来ると考えている対人協調等が関係していることが判明した。また、小さなことを気にする傾向が周囲からの影響の受けやすさや独自性の低さ、いつも落ち着いておれないというような感情統制の低さ、他人に頼れないという非依存性と関連していること、また完璧でない気が済まない完璧志向傾向は、周囲からの影響を受けにくく、自立認識が高く、非依存傾向が高い傾向がある一方で、独自性や感情統制が中程度の者が完璧傾向が強いことも判明した。

複数の自立性要因が相互に作用しながら、困難非回避傾向等と関連している可能性を探ったが、唯一、「自立認識」と「非依存傾向」とが相互作用しながら、「困難非回避」傾向と「関心・意欲」の強さと関連していることが認められた程度である。

ただこの僅かに認められた傾向については、かなり示唆に富むものであり、現代青年の顕著な傾向として理解できる。繰り返しになるが、「困難非回避」傾向は、自立認識が強い者は非依存傾向が強いものが強く、自立認識があまり強くない者は非依存傾向が強い者の方が弱い。また、「関心・意欲」の強さは、自立認識が強い者は依存できない（他者に依存しない）方が強いが、自立認識が曖昧な者では依存できない者は極端に弱い。この2つは行動への積極性とでも言うべきものであるが、自立認識が強くない青年にとって他者への依存関係を確保できていないと、行動レベルが低下してしまうことを窺わせる。

これらのいわば交互作用が、自立認識と依存性とについて認められ、類似の傾向だと考えられる独自性や影響されやすさ（影響受けにくさ）と依存傾向とについては認められない理由についても今後考える必要がある。他人からの影響を意識したり、自分らしさを大切にすることも、どうすれ

ば精神的に自立できるか分かっているという自立認識と同様、自立傾向の典型的なものであると考えることも可能だが、自立認識とは異質の次元であることを認めざるを得ない。

我々が自立性の中で重要であると考え期待したような、適切な依存傾向が望ましい態度・行動と関連するという傾向を、ここでは必ずしも見いだすことは出来ていない。その主たる原因として考えられることは、依存性そのものの測定に関する課題であり、単なる甘え、低い自立心としての依存傾向と、人間が持つべき適切な対人関係を形成し確保するための相互依存傾向とを区別した測定が不十分だと考えられることである。今回我々が測定した「依存性」の中に、我々の考える適切な依存性が含まれている可能性もあるが、その適切な依存性をより明確に、不適切な依存傾向と区別して測定するには、項目作成を中心とした更なる検討が必要である。

ここでの自立性尺度については、菱田 (2010) でも一定の妥当性の検証を行っているが、一般に質問紙の妥当性検証はかなり困難な側面を持っており、この分析のための困難非回避傾向等の測定におけるこの種の検討が十分とは言えない。ここで得られた結果においても、これらを考慮し結果の解釈については慎重さを必要とする。質問紙調査における課題は、その質問項目への回答がどの程度現実の個人の態度・高度を反映しているかであり、今回得られた結果は今後の研究のための仮説の一つであるとも言える。

質問紙調査の実施に当たって改めて検討すべき、現実的な或いはより基本的な課題もあると考

えている。質問紙調査は回答者の全面的な協力の下に成り立っているが、現実的には回答を依頼された協力被依頼者たちが必ずしも全面的に協力する場合ばかりではない。回答することに積極的でない場合もあり、回答に対する抵抗感を感じる人たちもいると思われる。このような視点から菱田ら (2010) においても、我々調査者から考えて適切ではない回答を知ることが必要であると考え、それを選別するいくつか試みた。

我々の試みは、とても古典的な方法である。我々も考えたことは、調査者の意図と回答に理解し協力してくれる人たち (本研究では大学生) の適切な回答を確保することである。我々の用意した調査内容が、彼らの興味関心にそうものでは必ずしもない。調査実施時の彼ら心身の状態も関係する等、その調査の成功を左右する要因は限りないとも言える。その中で、可能な限り良い状況下で実施できることを考える必要がある。また、ことばを媒介にして尋ね回答を得ている質問紙調査の限界についても認識し改善する努力が必要である。

(謝辞) 本研究は 2010 年度北陸学院大学共同研究に対する研究補助金による支援によって実施されたものである。

#### <文献>

- 菱田陽子・加藤礼子・金子勲榮 現代青年の自立性に関する研究：自立性尺度作成の試み、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、2号、2010、157-168
- 菱田陽子・野口喜美代・金子勲榮 現代青年の自立性に関する研究 (2)：交流分析における自我状態と自立性、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、3号、(印刷中)